

第2 特集



住宅メーカーの取組

～注文木造最大手の住友林業～

木造注文住宅のトップメーカーである住友林業が国産材の利用に力を入れている。国内の森林整備に積極的に貢献しようという方針によるもので、構造材や羽柄材、下地材のそれぞれで国産材製品の採用を大幅に増やしている。特に主要構造材については、国産材の使用率を現在の51%から70%にまで今期中に引き上げる計画で、この部分の国産材使用量（使用実材積）は年間で10万㎡を超える計算になる。同社の国産材利用戦略をレポートする。

耐力壁と柱・土台は オール国産材

ここ数年、環境意識の高まりや森林整備の必要性に対する理解の広まりを背景として、住宅供給業者の間に国産材を積極的に利用しようという動きが見られるようになっていた。その象徴的な事例として挙げられるのが、木造住宅のトップランナーである住友林業の取組である。

住友林業が国産材の利用拡大に向けて大きく舵を切ったのは、独自に開発した「クロスパネル」を構造用の面材として採用した平成一二年一〇月のことである。この製品は構成パーツが幅五五mm×厚さ九mmとサイズが小さく、製材時に発生する背板や小径材を有効に利用することができる。それだけでなく、品質面では壁倍率が基本二・五倍、最大五倍（専用釘二重打ちの場合）と高く、必要とされる壁耐力に比べて倍率を選択できるという使い勝手の良さも兼ね備えている。

平成一四年からは、同社ではヒノキの集成材を上級グレード商品の標準アイテムとして採用し、柱や土台といった軸組み部材の分野でも国産

材の積極的な利用を開始した。樹種としてヒノキを選んだのは、強度と耐久性の高さ、そして古くから高級建築材として使われてきたヒノキのブランド力に着目したからである。

このような国産材利用の歩みを加速させたのが平成一七年一〇月の「マイフォレスト」の発売である。「マイフォレスト」は同社の住宅商品に包括するブランドで、基本仕様

として柱と土台にヒノキの集成材を採用した（北海道ではカラマツ集成材）。つまり、これ以後、同社が供給する住宅の柱と土台はすべて国産材になったのである。



耐力壁として使われるクロスパネルはスギもしくはカラマツで製造される。同じ厚み（9mm）の構造用合板に比べや約 1.3 倍の剛性を有しながら、重量は 6、7 割程度と軽く、扱いやすい